

蜘蛛となめくじと狸

宮沢賢治

青空文庫

蜘蛛と、銀色のなめくじとそれから顔を洗ったことのない狸とはみんな立派な選手でした。

けれども一体何の選手だったのか私はよく知りません。

山猫^{やまねこ}が申しましたが三人はそれはそれは実に本気の競争をしていたのだそうです。

一体何の競争をしていたのか、私は三人がならんでかける所も見ませんし学校の試験で一番二番三番ときめられたことも聞きません。

一体何の競争をしていたのでしょうか、蜘蛛は手も足も赤くて長く、胸には「ナンペ」と書いた蜘蛛文字のマークをつけていましたしなめくじはいつも銀いろのゴムの靴^{くつ}をはいていました。又狸^{また}は少しこわれてはいましたが運動シャツポをかぶっていました。

けれどもとにかく三人とも死にました。

蜘蛛は蜘蛛^{くもれき}暦三千八百年の五月に没^なくなり銀色のなめくじがその次の年、狸が又その次の年死にました。三人の伝記をすこしよく調べて見ましょう。

一、赤い手長の蜘蛛

蜘蛛の伝記のわかっているのは、おしまいの一ケ年間だけです。

蜘蛛は森の入口いりぐちの檜ならの木に、どこからかある晩、ふつと風に飛ばされて来てひっかかりました。蜘蛛はひもじいのを我慢がまんして、早速さつそくお月様の光をさいわいに、網あみをかけはじめました。

あんまりひもじくておなかの中にはもう糸がない位でした。けれども蜘蛛は「うんとこせうんとこせ」と云いいながら、一生けん命糸をたぐり出して、それは小さな二銭銅貨位の網をかけました。

夜あけごろ、遠くから蚊かがくうんとうなつてやって来て網につきあたりました。けれどもあんまりひもじいときかけた網なので、糸に少しもねばりがなくて、蚊はすぐ糸を切つて飛んで行こうとしました。

蜘蛛はまるできちがいのように、葉のかげから飛び出してむんずと蚊に食いつきました。蚊は「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」と哀あわれな声で泣きましたが、蜘蛛は物も云わずに頭から羽からあしまで、みんな食ってしまいました。そしてホツと息を吐いてしばらくそらを向いて腹をこすつてから、又少し糸をはきました。そして網が一ま

わり大きくなりました。

蜘蛛はそして葉のかげに戻もとつて、六つの眼めをギラギラ光らせてじつと網をみつめて居おりました。

「ここはどこでござりまするな。」と云いながらめくらのかげろうが杖つえをついてやって参りました。

「ここは宿屋ですよ。」と蜘蛛が六つの眼を別々にパチパチさせて云いました。

かげろうはやれやれというように、巢すへ腰こしをかけました。蜘蛛は走って出ました。そして

「さあ、お茶をおあがりなさい。」と云いながらかげろうの胴どうなか中にむんずと噛かみつきました。

かげろうはお茶をとろうとして出した手を空にあげて、バタバタもがきながら、

「あわれやむすめ、父親が、

旅で果てたと聞いたなら」

と哀れな声で歌い出しました。

「えい。やかましい。じたばたするな。」と蜘蛛が云いました。するとかげろうは手を合

せて

「お慈悲じひでございます。遺言ゆいごんのあいだ、ほんのしばらくお待ちなされて下されませ。」
とねがいました。

蜘蛛もすこし哀れになつて

「よし早くやれ。」といつてかげろうの足をつかんで待つていました。かげろうはほんとうにあわれな細い声ではじめから歌い直しました。

「あわれやむすめちちおやが、

旅ではたと聞いたなら、

ちさいあの手しろてこうに白手甲、

いとし巡じゅんれ礼の雨とかぜ。

もうしご冥みょうが加かご報謝と、

かどなみなみに立つとても、

非道の蜘蛛の網あみざしき、

さわるまいぞや。よるまいぞ。」

「小しやくなことを。」と蜘蛛はただ一息に、かげろうを食い殺してしまいました。そし

てしばらくそらを向いて、腹をこすつてからちよつと眼をぱちぱちさせて

「小しやくなことを言うまいぞ。」とふざけたように歌いながら又糸をはきました。

網は三まわり大きくなつて、もう立派な蜘蛛の巣です。蜘蛛はすっかり安心して、又葉のかげにかくれました。その時下の方でいい声で歌うのをききました。

「赤いてながのくうも、

天のちかくをはいまわり、

スルスル光のいとをはき、

きいらりきいらり巣をかける。」

見るとそれはきれいな女の蜘蛛でした。

「ここへおいで。」と手長の蜘蛛が云つて糸を一本すうつときげてやりました。

女の蜘蛛がすぐそれにつかまつてのぼつて来ました。そして二人は夫婦になりました。

網には毎日沢たくさん山食くべるものがかかりましたのでおかみさんの蜘蛛は、それを沢山たべてみんな子供にしまいました。そこで子供が沢山生まれました。ところがその子供らはあんまり小さくてまるですきとおる位です。

子供らは網の上ですべつたり、相撲すもうをとつたり、ぶらんこをやつたり、それはそれはに

ぎやかです。おまけにある日とんぼが来て今度蜘蛛を虫けら会の相談役にするというみんなの決議をつたえました。

ある日夫婦のくもは、葉のかけにかくれてお茶をのんでいますと、下の方でへらへらした声で歌うものがあります。

「ああかい手ながのくうも、

できたむすこは二百疋^{びき}、

めくそ、はんかけ、蚊のなみだ、

大きいところで稗^{ひえ}のつぶ。」

見るとそれは大きな銀色のなめくじでした。

蜘蛛のおかみさんはくやしがつて、まるで火がついたように泣きました。

けれども手長の蜘蛛は云いました。

「ふん。あいつはちかごろ、おれをねたんてるんだ。やい、なめくじ。おれは今度は虫けら会の相談役になるんだぞ。へっ。くやしいか。へっ。てまえなんかいくらからだがばかりふとつても、こんなことはできまい。へっへっ。」

なめくじはあんまりくやくして、しばらく熱病になって、

「うう、くもめ、よくもぶじよくしたな。うう。くもめ。」と聞いていました。

網は時々風にやぶれたりごろつきのかぶとむしにこわされたりしましたけれどもくもは
 すぐすうすう糸をはいて修繕しゅうぜんしました。

二百疋の子供は百九十八疋まで蟻ありに連れて行ゆかれたり、行衛ゆくえふめい不明になったり、赤痢せきりにか
 かったりして死んでしまいました。

けれども子供らは、どれもあんまりお互いに似ていましたので、親ぐもはすぐ忘れてし
 まいました。

そして今はもう網はすばらしいものです。虫がどんどんひっかかります。

ある日夫婦の蜘蛛は、葉のかけにかくれてお茶をのんでいますと、一疋の旅の蚊がこっ
 ちへ飛んで来て、それから網を見てあわてて飛び戻って行きました。

すると下の方で

「ワツハツハ。」と笑う声がしてそれから太い声で歌うのが聞えました。

「ああかいてながのくうも、

あんまり網がまずいので、

八千二百里旅の蚊も、

くうんとうなつてまわれ右。」

見るとそれは顔を洗ったことのない狸でした。蜘蛛はキリキリキリツとはがみをして云いました。

「何を。狸め。一生のうちにはきつとおれにおじぎをさせて見せるぞ。」

それからは蜘蛛は、もう一生けん命であちこちに十も網とおをかけたなり、夜も見はりをしりしました。ところが困ったことは腐敗ふはいしたのです。食物しょくもつがずんずんたまって、腐敗したのです。そして蜘蛛の夫婦と子供にそれがうつりました。そこで四人よったりは足のさきからだんだん腐くされてべとべとになり、ある日とうとう雨に流れてしまいました。

それは蜘蛛暦三千八百年の五月の事です。

二、銀色のなめくじ

丁度蜘蛛が林の入口いりぐちの櫓ならの木に、二銭銅貨の位の網をかけた頃ころ、銀色のなめくじの立派なおうちへかたつむりがやって参りました。

その頃なめくじは林の中では一番親切だという評判でした。かたつむりは

「なめくじさん。今度は私もわたしすっかり困ってしまいましたよ。まるで食べるものはなし、水はなし、すこしばかりお前さんのためであるふきのつゆを呉くれませんか。」と云いました。

するとなめくじが云いました。

「あげますともあげますとも。さあ、おあがりなさい。」

「ああありがとうございます。助かります。」と云いながらかたつむりはふきのつゆをどくどくのみました。

「もつとおあがりなさい。あなたと私わたしとは云わば兄弟。ハツハハ。さあ、さあ、もう少しおあがりなさい。」となめくじが云いました。

「そんならも少しいただきます。ああありがとうございます。」と云いながらかたつむりはも少しのみました。

「かたつむりさん。気分がよくなったら一つ相撲をとりましょうか。ハツハハ。久しぶりです。」となめくじが云いました。

「おなかですいて力がありません。」とかたつむりが云いました。

「そんならたべ物をあげましょう。さあ、おあがりなさい。」となめくじはあざみの芽や

なんか出しました。

「ありがとうございます。それではいただきます。」といいながらかたつむりはそれを喰たべました。

「さあ、すもうをとりましょう。ハツハハ。」となめくじがもう立ちあがりました。かたつむりも仕方なく、

「私はどうも弱いのですから強く投げないで下さい。」と云いながら立ちあがりました。わたし

「よっしょ。そら。ハツハハ。」かたつむりはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりましょう。ハツハハ。」

「もうつかれてだめです。」

「まあもう一ぺんやりましょうよ。ハツハハ。よっしょ。そら。ハツハハ。」かたつむりはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりましょう。ハツハハ。」

「もうだめです。」

「まあもう一ぺんやりましょうよ。ハツハハ。よっしょ、そら。ハツハハ。」かたつむりはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりましょう。ハツハハ。」

「もうだめ。」

「まあもう一ぺんやりましょうよ。ハツハハ。よつしよ。そら。ハツハハ。」かたつむりはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりましょう。ハツハハ。」

「もう死にます。さよなら。」

「まあもう一ぺんやりましょうよ。ハツハハ。さあ。お立ちなさい。起こしてあげましょう。よつしよ。そら。ハツハツへ。」かたつむりは死んでしまいました。そこで銀色のなめくじはかたつむりをペロリと喰べてしまいました。

それから一ヶ月ばかりたって、とかげがなめくじの立派なおうちへびっこをひいて来ました。そして

「なめくじさん。今日は。お薬を少し呉れませんか。」と云いました。

「どうしたのです。」となめくじは笑って聞きました。

「へびに噛かまれたのです。」ととかげが云いました。

「そんならわけはありません。私わたしが一寸ちよつとそこを嘗なめてあげましょう。なあにすぐなおり

ますよ。ハツハハ。」となめくじは笑って云いました。

「どうかお願い申します。」ととかげは足を出しました。

「ええ。よござんすとも。わたくし私とあなたとは云わば兄弟。ハツハハ。」となめくじは云いました。

そしてなめくじはとかげの傷に口をあてました。

「ありがとうございます。なめくじさん。」ととかげは云いました。

「もう少しよく嘗めないとあとで大変ですよ。今度又また来ててももう直してあげませんよ。ハツハハ。」となめくじはもがもが返事をしながらやはりとかげを嘗めつづけました。

「なめくじさん。何だか足が溶とけたようですよ。」ととかげはおどろいて云いました。

「ハツハハ。なあに。それほどじゃありません。ハツハハ。」となめくじはやはりもがもが答えました。

「なめくじさん。おなかは何だか熱くなりましたよ。」ととかげは心配して云いました。

「ハツハハ。なあにそれほどじゃありません。ハツハハ。」となめくじはやはりもがもが答えました。

「なめくじさん。からだが半分とけたようですよ。もうよして下さい。」ととかげは泣き

声を出しました。

「ハツハハ。なあにそれほどじやありません。ほんのも少しです。も一分五厘りんですよ。ハツハハ。」となめくじが云いました。

それを聞いたとき、とかげはやつと安心しました。丁度心臓がとけたのです。

そこでなめくじはペロリとかげをたべました。そして途方とほうもなく大きくなりました。

あんまり大きくなつたので嬉うれしまぎれについあの蜘蛛くもをからかつたのです。

そしてかえつて蜘蛛からあざけられて、熱病を起したのです。そればかりではなく、なめくじの評判はどうもよくなりました。

なめくじはいつでもハツハハと笑つて、そしてヘラヘラした声で物を言うけれども、どうも心がよくなくて蜘蛛やなんかよりは却かえつて悪いやつだといつのでみんなが軽べつをはじめました。殊ことに狸はなめくじの話が出るといつでもヘンと笑つて云いました。

「なめくじなんてまずいもんさ。ぶま加減は見られたもんじやない。」

なめくじはこれを聞いて怒おこつて又病氣になりました。そのうちに蜘蛛は腐敗して雨で流れてしまいましたので、なめくじも少しせいせいしました。

次の年ある日雨あま蛙がえるがなめくじの立派なおうちへやつて参りました。

そして、

「なめくじさん。こんにちは。少し水を吞ませませんか。」と云いました。

なめくじはこの雨蛙もペロリとやりたかったので、思い切つていい声で申しました。

「蛙さん。これはいらつしやい。水なんかいくらでもあげますよ。ちかごろはひでりですけれどもなかに云わばあなたと私は兄弟わたくし。ハツハハ。」そして水がめの所へ連れて行きゆました。

蛙はどくどくどくどく水を呑んでからとぼけたような顔をしてしばらくなめくじを見てから云いました。

「なめくじさん。ひとつすもうをとりましようか。」

なめくじはうまいと、よろこびました。自分が云おうと思つていたのを蛙の方が云つたのです。こんな弱つたやつならば五へん投げつければ大ていペロリとやれる。

「とりましよう。よつしよ。そら。ハツハハ。」かえるはひどく投げつけられました。

「もう一ぺんやりましよう。ハツハハ。よつしよ。そら。ハツハハ。」かえるは又投げつけられました。するとかえるは大へんあわててふところから塩のふくろを出して云いました。

「土俵へ塩をまかなくちやだめだ。そら。シユウ。」塩がまかれました。

なめくじが云いました。

「かえるさん。こんどはきつと私わたくしなんかまけますね。あなたは強いんだもの。ハツハハ。よつしよ。そら。ハツハハ。」蛙はひどく投げつけられました。

そして手足をひろげて青じろい腹を空に向けて死んだようになってしまいました。銀色のなめくじは、すぐペロリとやろうと、そつちへ進みましたがどうしたのか足がうごきません。見るともう足が半分とけています。

「あ、やられた。塩だ。畜ちくしやう生。」となめくじが云いました。

蛙はそれを聞くと、むつくり起きあがつてあぐらをかいて、かばんのような大きな口を一ぱいにかけて笑いました。そしてなめくじにおじぎをして云いました。

「いや、さよなら。なめくじさん。とんだことになりましたね。」

なめくじが泣きそうになって、

「蛙さん。さよ……。」と云つたときもう舌がとけました。雨蛙はひどく笑いながら

「さよならと云いたかつたのでしよう。本当にさよならさよなら。暗い細路ほそみちを通じて向うへ行つたら私の胃袋わたしにどうかよろしく云つて下さいな。」と云いながら銀色のなめくじ

をペロリとやりました。

三、顔を洗わない狸たぬき

狸は顔を洗いませんでした。

それもわざと洗わなかったのです。

狸は丁度蜘蛛が林の入口いりぐちの櫓やぐらの木に、二銭銅貨位の巢すをかけた時、すっかりお腹なかが空すいて一本の松まつの木によりかかって目をつぶっていました。すると兎うさぎがやって参りました。

「狸さま。こうひもじくでは全く仕方ございません。もう死ぬだけでございます。」

狸がきもののえりを搔かき合せて云いました。

「そうじゃ。みんな往生やまねじゃ。山猫こだい大明神みょうじんさまのおぼしめしどおりじゃ。な。なま

ねこ。なまねこ。」

兎も一いっしょ緒ねんねこに念猫をとえはじめました。

「なまねこ、なまねこ、なまねこ、なまねこ。」

狸は兎の手をとつてもつと自分の方へ引きよせました。

「なまねこ、なまねこ、みんな山猫さまのおぼしめしどおり、なまねこ。なまねこ。」と云いながら兎の耳をかじりました。兎はびつくりして叫びました。

「あ痛つ。狸さん。ひどいじゃありませんか。」

狸はむにやむにや兎の耳をかみながら、

「なまねこ、なまねこ、みんな山猫さまのおぼしめしどおり。なまねこ。」と云いながら、とうとう兎の両方の耳をたべてしまいました。

兎もそうきいてみると、たいへんうれしくてボロボロ涙をこぼして云いました。

「なまねこ、なまねこ。ああありがたい、山猫さま。私のような悪いものでも助かりますなら耳の二つやそこらなんでもございませぬ。なまねこ。」

狸もそら涙をボロボロこぼして

「なまねこ、なまねこ、私のようなあさましいものでも助かりますなら手でも足でもさしあげます。ああありがたい山猫さま。みんなおぼしめしのまま。」と云いながら兎の手をむにやむにや食べました。

兎はますますよろこんで、

「ああありがたや、山猫さま。私のようないくじないものでも助かりますなら手の二本や

そこらはいとませぬ。なまねこ、なまねこ。」

狸はもうなみだで身体からだもふやけそうに泣いたふりをしました。

「なまねこ、なまねこ。私わたしのようなどてもかなわぬあさましいものでも、お役にたてて下
されますか。ああありがたや。なまねこなまねこ。おぼしめしのとおり。むにやむにや。」

兎はすっかりなくなってしまうました。

そこで狸のおなかの中で云いました。

「すっかりだまされた。お前の腹の中はまっくらだ。ああくやしい。」

狸は怒おこって云いました。

「やかましい。はやく消化しろ。」

そして狸はポンポポンポンとはらつづみをうちました。

それから丁度二ヶ月たちました。ある日、狸は自分の家うちで、例のとおりありがたいごき
とうをしていますと、狼おおかみがお米を三升じょうさげて来て、どうかお説教をねがいますと云いまし
た。

そこで狸は云いました。

「みんな山ねこさまのおぼしめしじや。お前がお米を三升もって来たのも、わしがお前に

説教するのもしや。山ねこさまはありがたいお方じや。兎はおそばに参つて、大臣になられたげな。お前もものの命をとつたことは、五百や千では利きくまいに、早うぎんげさつしやれ。でないと山ねこさまにえらい責せめく苦にあわされますぞい。おお恐おそろしや。なまねこ。なまねこ。」

狼はおびえあがつて、きよろきよろしながらたずねました。

「そんならどうしたら助かりますかな。」

狸が云いました。

「わしは山ねこさまのお身代りじやで、わしの云うとおりさつしやれ。なまねこ。なまねこ。」

「どうしたらようございましょう。」と狼があわててききました。狸が云いました。

「それはな。じつとしていさしやれ。な。わしはお前のきばをぬくじや。な。お前の目をつぶすじや。な。それから。なまねこ、なまねこ、なまねこ。お前のみみを一ちよつと寸かじるじや。なまねこ。なまねこ。こらえなされ。お前のあたまをかじるじや。むにや、むにや。なまねこ。堪かんにん忍が大事じやぞえ。なま……。むにやむにや。お前のあしをたべるじや。うまい。なまねこ。むにや。むにや。おまえのせなかを食うじや。うまい。むにやむにや。

むにや。」

狼は狸のはらの中で云いました。

「ここはまつくらだ。ああ、ここに兎の骨がある。誰が殺したろう。殺したやつは狸さまにあとでかじられるだろうに。」

狸は無理に「ヘン。」と笑っていました。

さて蜘蛛はとけて流れ、なめくじはペロリとやられ、そして狸は病気にかかりました。それはからだの中に泥や水がたまって、無暗にふくれる病気で、しまいには中に野原や山ができて狸のからだは地球儀のようにまんまるになりました。

そしてまつくろになって、熱にうかされて、

「うう、こわいこわい。おれは地獄行きのマラソンをやったのだ。うう、切ない。」といながらとうとう焦げて死んでしまいました。

*

なるほどそうしてみると三人とも地獄行きのマラソン競争をしていたのです。

青空文庫情報

底本：「新編 風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

2001（平成13）年4月25日14刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：久保格

校正：林 幸雄

2003年8月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蜘蛛となめくじと狸

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>